

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年10月27日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科 言語学専修

職 名・学 年 教務補佐員

氏 名 植 田 尚 樹

助 成 の 種 類	平成27年度 ・ 研究者交流支援 ・ 在外研究短期助成		
研 究 課 題 名	モンゴル語の音韻現象の記述とその理論的考察		
受 入 機 関	モンゴル国立大学言語文化学部		
渡 航 期 間	平成 27 年 8 月 8 日 ～ 平成 27 年 9 月 27 日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	492,000 円	
	使用した助成金額	492,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	航空賃(燃油サーチャージ等を含む)	96,060 円
		鉄道賃・バス賃(日本国内)	6,160 円
鉄道賃・バス賃(乗り継ぎ・現地)		15,110 円	
滞在費		374,670 円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今回の助成のおかげで金銭的な不安なく現地調査・研究に打ち込むことができ、感謝しております。助成金の使途についても自由度が高く、書類や手続きなども必要最小限であったため、面倒な書類作成に時間を取られることもなく、研究に集中することができました。		

成果の概要／植田尚樹

平成 27 年度助成事業・在外研究短期助成

研究課題名：「モンゴル語の音韻現象の記述とその理論的考察」

報告者は、モンゴル語の音韻論において研究が十分でない現象（アクセント、第 2 音節以降の母音体系など）の実態を調査、記述するとともに、記述した現象を理論的に分析し、当該現象と言語普遍性との関係を探る、という目的で、平成 27 年 8 月 8 日から 9 月 27 日までモンゴル国立大学を拠点に在外研究を行った。研究は、主にモンゴル語母語話者への聞き取り調査および録音、得られた音声データの分析、記述的一般化、理論的分析という手順で行われた。以下、得られた成果を順に述べる。

(i) アクセント

モンゴル語のアクセントは意味の区別に関わらないが、完全に自由に発音されるわけではなく、一定のピッチのパターンがある。このピッチパターンについて近年実験音声学的な研究が行われ、単純語のピッチパターンはある程度解明されているが、複合語や句などの大きな単位でのピッチパターンは必ずしも明らかではなかった。

報告者は、「形容詞＋名詞」の構造を持つ名詞句、および「名詞＋動詞」「副詞＋動詞」の構造を持つ動詞句を対象に、前部要素と後部要素のピッチを比較し、ピッチパターンを記述した。その結果、「前部要素、後部要素ともに 1 音節語」という条件下において、前部要素の末子音の種類によってピッチパターンが異なる、という結果を得た。

前部要素の末子音	ピッチパターン	例
無声阻害音	前部要素が低く、後部要素が高い (LH)	u <u>s</u> uo 「水を飲め」 L H
無声阻害音以外	前部要素が高く、後部要素が低い (HL)	da <u>r</u> s uo 「ワインを飲め」 H L

この結果は、音韻構造によってピッチパターンが決定されていることを意味している。また通言語的な観点からは「分節音のアクセントへの影響」であると位置づけられる。

(ii) 借用語の母音長と第 2 音節以降の母音体系

モンゴル語の母音体系について、近年の研究では、第 1 音節には母音の長短の音韻的な対立があるが、第 2 音節以降にはない、と言われている。確かに本来語の分析にはこの解釈が妥当であるが、借用語を考慮に入れると問題が生じる。

本研究では、ロシア語、英語からの借用語（2 音節語）を対象に、各母音の母音長およびピッチを測定し、原語でのストレスの有無によって結果に差が生じるかを考察した。その結果、原語でストレスを持つ母音は、ストレスを持たない母音に比べて有意に母音長が長く、ピッチが高いことが明らかになった。

原語の ストレス位置	母音長の平均値 (sec.)		ピッチの差の 平均(Hz)*	ピッチ パターン	語例
	第 1 音節	第 2 音節			
第 1 音節	0.138689	0.058551	-4.66326	HL	léktor 「講師」
第 2 音節	0.081581	0.108939	31.53501	LH	motór 「モーター」

*ピッチの差の平均=第2音節のピッチ-第1音節のピッチ

記述的には、原語のストレスの位置によって、各母音の母音長および語のピッチパターンが明らかに異なると言える。この結果を理論的に分析すると、第2音節以降にも第1音節と同様に母音の長短の対立を認め、原語でストレスを持つ母音は長母音、ストレスを持たない母音は短母音として借用される、と解釈することが妥当である。音節位置によって不均衡な母音体系を想定するよりも、どの位置でも同じ母音体系を持つと想定する方が、整合性の点でも優れている。

なおこの成果は、日本言語学会第151回大会(2015年11月28日)口頭発表にて報告されることが決定している。

(iii) 第2音節以降における弱化母音の有無

先述したように、モンゴル語の第2音節以降には母音の長短の対立がないと言われており、音素的母音と(音素的でない)挿入母音の区別のみがあるとされている。挿入母音は、母音調和と音節構造から音価も位置も予測可能な母音であり、規則によって挿入される。正書法では母音1つで書かれる。

しかし、(少なくとも正書法上は)挿入母音の有無のみによって意味を区別する語のペアが存在する(alax「殺す」vs. alx「ハンマー」など)。規則に従えば挿入母音が入らないことが予想されるにもかかわらず、alax「殺す」では正書法において母音が現れる。

これらの語は発音上も挿入母音の有無のみによって区別されているのかどうかを明らかにするため、音声実験を行った。実験は、ミニマルペアをなす語の単独発話、およびキャリア文に入れての発話の両方を行った。

実験は9人の母語話者を対象に行ったが、挿入母音の有無は語や話者によって違いがあり、正書法上母音があっても挿入母音が見れない場合がある一方、正書法上母音がなくとも挿入母音が見れる場合もあることが明らかになった。また、単独発話かキャリア文中かによっても結果に違いがあり、キャリア文中では挿入母音が見れにくいという傾向も見られた。

正書法	単独発話	キャリア文中
母音あり (alax「殺す」など)	○	△
母音なし (alx「ハンマー」など)	△	×

この結果は、話者や音声環境によって挿入母音の有無が異なることを意味しているが、挿入母音の頻度には一定の偏りがあることから、挿入母音の有無が意味の区別に関与していることも同時に示している。このことから、「挿入母音は現れる位置が完全に予測可能であり、音素的でない」という分析には疑問の余地があると言える。またこの分析は、音韻論的解釈に話者や音声環境による

差異を考慮に入れた定量的な分析が必要な場合があることを示しており、他言語の音韻論研究にも貢献する可能性がある。

なおこの成果に関しては、「モンゴル語の第2音節以降におけるCxとCVxの対立について」(仮題)というタイトルで研究論文を執筆中である。

以上のように、本研究はモンゴル語の音韻論において研究が十分でない現象の実態を記述し、明らかにすることで、「モンゴル語学の発展」「言語多様性の記述」という成果を上げた。また、記述した現象を通言語的な観点から理論的に分析することによって、アクセントや母音体系についての言語普遍的な特性の発見に寄与するという成果が得られた。